

市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ

－ 開発に伴う範囲確認調査報告書 －

平成 25（2013）年 3 月
名護市教育委員会

はじめに

本報告書は、名護市教育委員会が平成 19～23 年度にかけて実施した市内遺跡詳細分布調査のうち、在沖米軍海兵隊基地キャンプ・シュワブ以外の地域で実施した調査の成果をまとめたものです。

本調査は、これまでの文化財調査の成果を踏まえながら、今後開発による影響を受けるとされる埋蔵文化財の適切な保護を図るための基礎資料収集を行うために文化庁国庫補助を受けて実施した事業であります。

今回報告する平成 19～23 年度の調査では、周知の遺跡における開発計画に伴う範囲確認調査を実施することにより、周知の遺跡の範囲及び残存状況などの基礎情報を得ることができました。本市教育委員会においては、これらの情報を活かしか今後の埋蔵文化財の適切な保護を図っていく所存でございます。

埋蔵文化財は、その地域の成り立ちや文化を考える上で必要不可欠なものであります。本報告書が名護市の歴史を知る上での基礎資料として多くの方々に活用されますとともに、市民の方々が地域に残された文化財の保護と活用に更なる関心を寄せていただき、文化のまちづくりのための一助となれば幸いに存じます。

末尾になりましたが、本業務を実施するにあたり多くの方々に協力を頂きました。特に、埋蔵文化財の記録保存にご理解・ご協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げ、刊行のあいさつとします。

平成 25（2013）年 3 月

名護市教育委員会
教育長 座間味 法子



巻頭図版 1. 安和与那川原遺跡航空写真



巻頭図版 2. ナングシク遺跡群・名護貝塚・溝原貝塚航空写真



巻頭図版 3. 大堂原貝塚航空写真



巻頭図版 4. 羽地間切番所航空写真



巻頭図版 5. 天仁屋原遺跡航空写真



巻頭図版 6. 安和与那川原遺跡遠景



巻頭図版 7. ナングシク大堀切 (第 27 図 堀切 1)



巻頭図版 8. ナングシク小堀切 (第 27 図 堀切 2)

例 言

1. 本報告書は、平成 19 ～ 23 年度に文化庁国庫補助を受けて名護市教育委員会が事業主体となり実施した市内遺跡詳細分布調査のうち、在沖米軍海兵隊基地キャンプ・シュワブ以外の地域において実施した文化財調査の成果を収録したものである。但し、ナングシク遺跡群の地形測量調査においてのみ平成 24 年度の調査成果も収録した。
2. 今回の調査対象地域は、周知の遺跡の範囲内及び周辺地域において開発計画が举っている地域を対象とした。
3. 調査に際して、沖縄県北部土木事務所の協力を得た。
4. 本書掲載の地形図は、名護市役所発行の 1/10,000、1/25,000 地形図を使用した。
5. 本事業における体制は、第 I 章第 2 節に記す。
6. 本書の執筆及び編集は、宮城智浩が担当した。
7. 本書掲載の図・表は宮城智浩・真栄田義人・仲村美代子・宮里牧・岸本美枝子で作成した。
8. 本事業において、下記の方々のご協力・ご教示を賜ったので記して謝意を述べる。
自然科学分析 バリノ・サーヴェイ株式会社
9. 調査で得た図面・写真等各種記録及び遺物は全て名護市教育委員会文化課文化財係において保管している。

凡 例

1. 本書掲載の現況測量等における座標は日本測地系第 15 系を使用している。また、断面における基準高は海拔高を用いている。
2. 現況測量図や土層図等の縮尺は適宜設定している。
3. 土層及び遺物観察で使用した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帳』を使用した。
4. 本書における先史時代の時代区分は、沖縄現行編年を用いた。
5. 参考文献は、巻末に記載した。

本文目次

はじめに	i
巻頭図版	ii ~ iv
例言・凡例	v
本文目次	vii
第Ⅰ章 調査経緯	1
第1節 調査の目的及び経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経過	3
第Ⅱ章 調査地域の位置と環境	11
第1節 名護市の位置と地勢	11
第2節 名護市の地理・自然的環境	11
第3節 名護市の歴史的環境	12
第Ⅲ章 調査の方法	14
第1節 調査区及びグリッドの設定	14
第2節 調査の方法	14
第3節 時代区分について	16
第Ⅳ章 調査結果	17
第1節 試掘調査	17
第2節 地形測量調査	38
第Ⅴ章 総括	42
第1節 試掘調査	42
第2節 地形測量調査	43
おわりに	43
引用・参考文献	44
報告書抄録	45

挿図目次

第1図. 調査実施遺跡位置図	7
第2図. 名護市の遺跡分布図	8
第3図. 沖縄本島及び名護市の位置図	10
第4図. 名護市における地形大区分	12
第5図. 名護市の標高分布高度	12
第6図. 地区別	15
第7図. 安和与那川原遺跡位置図	17
第8図. 安和与那川原遺跡調査範囲及び試掘坑位置図	19
第9図. 安和与那川原遺跡試掘坑壁面	19
第10図. 安和与那川原遺跡出土土器	20
第11図. 安和与那川原遺跡出土土器及び貝製品	22
第12図. 名護貝塚位置図	24
第13図. 名護貝塚調査範囲及び試掘坑位置図	25
第14図. 井戸跡実測図	26
第15図. 天仁屋原遺跡位置図	27
第16図. 天仁屋原遺跡調査範囲及び試掘坑位置図	28
第17図. 溝原貝塚位置図	28
第18図. 溝原貝塚調査地位置図	28
第19図. 羽地間切番所跡位置図	29
第20図. 羽地間切番所跡試掘坑位置図	30
第21図. 大堂原貝塚位置図	31
第22図. 大堂原貝塚調査範囲及び試掘坑位置図	32
第23図. 大堂原貝塚試掘坑壁面	32
第24図. 大堂原貝塚出土土器	34
第25図. 大堂原貝塚出土貝製品及び石器	36
第26図. ナングシク遺跡群位置図	38
第27図. ナングシク地形図及びグシク内の拝所と文化財	41

図版目次

図版1. 安和与那川原遺跡出土土器	21
図版2. 安和与那川原遺跡出土土器及び貝製品	22
図版3. 大堂原貝塚出土土器	35
図版4. 大堂原貝塚出土貝製品及び石器	37

写真目次

写真1. 平成19年度調査風景	4
写真2. 平成20年度調査風景	4
写真3. 平成21年度調査風景	5
写真4. 平成22年度調査風景	6
写真5. 平成23年度調査風景	7
写真6. 安和与那川原遺跡調査状況	18
写真7. 1地区調査状況	24
写真8. 2地区調査状況	25
写真9. 天仁屋原遺跡調査状況	27
写真10. 溝原貝塚調査状況	29
写真11. 羽地間切番所跡調査状況	30
写真12. 大堂原貝塚調査状況	31
写真13. ナングシク近景 (1/3)	38
写真14. ナングシク近景 (2/3)	39
写真15. ナングシク近景 (3/3)	40

表目次

表1. 名護地域の間切から名護市への変遷	11
表2. 時代区分表	16
表3. 安和与那川原遺跡出土土器観察表	23
表4. 安和与那川原遺跡出土貝製品観察表	23
表5. 大堂原貝塚出土土器観察表	33
表6. 大堂原貝塚出土貝製品観察表	33
表7. 大堂原貝塚出土石器観察表	33

第Ⅰ章 調査経緯

第1節 調査の目的及び経緯

本市における遺跡分布調査は、昭和54(1979)～56(1981)年度にかけて行われ、『名護市の遺跡(2)』(1982)として刊行された。以後約30年の歳月が経過する中で、新たに発見されたものを含めると、現在80箇所の遺跡及び遺物散布地が確認され、中には開発行為などによって記録保存調査を余儀なくされた遺跡もある。今後もそのような事例が起こることが予想されることから、諸開発との円滑な調整及び埋蔵文化財の保護を図るため、これまでの予備調査で把握されている遺跡及び遺物散布地の残存範囲や状況、帰属時期及び遺跡の性格等について実態的な把握及び資料整備が必要不可欠である。

以上の状況から、本市では平成18(2006)年度以降、調査体制の整備・充実を図るとともに、平成19(2007)年度より文化庁国庫補助を得て、市内における遺跡詳細分布調査に着手した。今回の調査では、開発の予想される地域及びキャンプ・シュワブを中心に埋蔵文化財及び開発に伴う試掘・確認調査を行うとともに、過去の未踏査区域における基礎情報の収集を主な目的とした。

第2節 調査体制

平成19(2007)～24(2012)年度における文化財調査及び報告書作成は以下の体制で実施した。

平成19(2007)年度

事業主体	名護市教育委員会(所管：文化課)
事業責任者	教 育 長 稲嶺 進
	教 育 次 長 具志堅 満昭
事業総括	文 化 課 長 島福 善弘
事業事務	文 化 財 係 長 比嘉 久
	文化財係嘱託員 神谷 祐子
調査担当者	文 化 財 係 主 事 仲宗根 禎
	文化財係学芸員 亀川 彰子
	〃 宮城 智浩
調査補助員	文化財係嘱託員 岸本 卓巳
発掘作業員	桑江 勇・徳嶺 朝暉・渡口 京子・渡口 政治・山城 政則
	(氏名五十音順/以下同様)

平成20(2008)年度

事業主体	名護市教育委員会(所管：文化課)
事業責任者	教 育 長 稲嶺 進
	〃 比嘉 恵一
	教 育 次 長 具志堅 満昭
	事 務 局 参 事 中本 正泰

事業 総括	文化 課長	島福 善弘
事業 事務	文化 財係長	比嘉 久
	文化財係嘱託員	神谷 祐子
調査 担当者	文化 財係主事	仲宗根 禎
	文化財係学芸員	松原 彰子
	"	宮城 智浩
調査 補助員	文化財係嘱託員	岸本 卓巳
発掘 作業員	桑江 勇・徳嶺 朝暉・徳嶺 朝直・渡口 京子・渡口 政治	
	屋部 計・山城 政則	

平成 21 (2009) 年度

事業 主体	名護市教育委員会 (所管：文化課)
事業 責任者	教 育 長 比嘉 恵一
	教 育 次 長 中本 正泰
事業 総括	文化 課長 島福 善弘
事業 事務	文化 財係長 仲宗根 禎
	文化財係嘱託員 神谷 祐子
調査 担当者	文化財係学芸員 松原 彰子
	" 宮城 智浩
調査 補助員	文化財係嘱託員 井上 浩彰
発掘 作業員	徳嶺 朝暉・徳嶺 朝直・渡口 京子・渡口 政治・仲程 源信
	屋部 計・山城 政則・湧川 博弥

平成 22 (2010) 年度

事業 主体	名護市教育委員会 (所管：文化課)
事業 責任者	教 育 長 比嘉 恵一
	教 育 次 長 中本 正泰
事業 総括	文化 課長 島福 善弘
事業 事務	文化 財係長 仲宗根 禎
	文化財係嘱託員 神谷 祐子
調査 担当者	文化財係学芸員 松原 彰子
	" 宮城 智浩
調査 補助員	文化財係嘱託員 井上 浩彰
発掘 作業員	石川 博利・大城 正治・下地 省三・玉木 健二・田港 朝孟
	太良 義一・仲程 源信・山城 政則
資料整理作業員	石川 マサミ・岸本 美枝子

平成 23 (2011) 年度

事業 主体	名護市教育委員会 (所管：文化課)
事業 責任者	教 育 長 比嘉 恵一
	" 座間味 法子

	教 育 次 長	渡具知 武美
事 業 総 括	文 化 課 長	島福 善弘
事 業 事 務	文 化 財 係 長	仲宗根 禎
	文化財係嘱託員	神谷 祐子
調 査 担 当 者	文化財係学芸員	松原 彰子
	"	宮城 智浩
	"	稲福 英希
発 掘 作 業 員	上地 厚行・金城 善紀・田港 朝孟・太良 義一・仲程 源信	
	仲村 徹明・山城 保・山城 政則	

平成 24 (2012) 年度

事 業 主 体	名護市教育委員会 (所管：文化課)	
事 業 責 任 者	教 育 長	座間味 法子
	教 育 次 長	渡具知 武美
事 業 総 括	文 化 課 長	島福 善弘
事 業 事 務	文 化 財 係 長	友寄 凡子
	文化財係嘱託員	神谷 祐子
調 査 担 当 者	文化財係学芸員	宮城 智浩
	"	宮城 弘樹
調 査 補 助 員	文化財係嘱託員	真栄田 義人 仲村 美代子・宮里 牧
資料整理作業員	岸本 美枝子	

第 3 節 調査経過

調査実施年度における作業経過を以下に整理する。

平成 19 年度

初年度における調査では、安和与那川原遺跡（屋部地区）において範囲確認調査を実施した。平成 19 年 11 月に調査に係る調整を沖縄県北部土木事務所河川海岸班と行い、同年 12 月 19 日より現地調査に着手した。砂防事業予定地の中で発掘承諾の得られた範囲において 4 箇所の試掘坑を設けて試掘調査を実施し、翌年 1 月 30 日に埋め戻しを行い現地調査を終えた。

平成 19(2007) 年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
諸準備												
文化財調査												
資料整理												



1. 発掘作業風景

写真 1. 平成 19 年度調査風景



2. 記録作業風景

平成 20 年度

当該年度における調査では、昨年度に引き続き安和与那川原遺跡をはじめ、名護貝塚（名護地区）及び天仁屋原遺跡（久志地区）の3遺跡において範囲確認調査を実施した。平成20年11月に、当市が計画する「名護市中心市街地商業基盤等整備事業」の予定地が名護貝塚に隣接することから、当市産業部中心市街地活性化推進プロジェクトチームより文化財調査の協力依頼要請がなされた。その後、調査に係る調整を行い同年12月19日より現地調査に着手した。整備事業の計画予定地の大部分が、調査当時も市営市場やその他商店などが営業していたため、既に更地になっていた土地を調査対象地とした。調査対象地において4箇所の試掘坑を設けて試掘調査を実施し、同年12月5日に埋め戻しを行い現地調査を終えた。調査終了後、前年度に引き続き安和与那川原遺跡の範囲確認調査のための調整を沖縄県北部土木事務所河川海岸班と行った。また、同年12月に当市建設部建設計画課より天仁屋第二市営住宅建設予定地における埋蔵文化財の有無照会がなされた。照会地が天仁屋原遺跡の近隣地に位置することから、範囲確認調査を実施することで調整を進め、安和与那川原遺跡の現地調査後に調査を実施する運びとなった。翌年1月7日より安和与那川原遺跡における砂防事業予定地の中で新たに発掘承諾の得られた範囲において3箇所の試掘



1. 名護貝塚調査風景



2. 安和与那川原遺跡発掘作業風景



3. 天仁屋原遺跡調査風景

写真 2. 平成 20 年度調査風景

坑を設けて現地調査に着手し、同年1月15日の午前中に埋め戻しを行い現地調査を終えた。そして、同日午後より天仁屋第二市営住宅建設予定地において2箇所の試掘坑を設けて現地調査に着手し、翌1月16日に埋め戻しを行い現地調査を終えた。同年3月9日より安和与那川原遺跡において新たに発掘承諾が得られた範囲において現地調査に着手した。天候などの関係により調査対象範囲における除草や倉庫などの設置作業のみを行い、翌年度4月より試掘調査に着手することとし、平成20年度の調査を終えた。また、同年3月には建設部建設計画課より、まちなか市営住宅建設予定地における埋蔵文化財の有無照会がなされた。予定地が名護貝塚と隣接し、遺物包含層が残存する可能性があると考えられたため範囲確認調査を実施する運びとなり、次年度の安和与那川原遺跡における範囲確認調査後に調査を実施することで調整を行った。

平成20(2008)年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
誌準備									■名護貝塚			
									■安和与那川原遺跡			
									■天仁屋原遺跡			
文化財調査									■名護貝塚			
									■安和与那川原遺跡			
									■天仁屋原遺跡			
資料整理												

平成21年度

当該年度における調査では、平成19～20年度に引き続き安和与那川原遺跡及び名護貝塚、そして溝原貝塚（名護地区）、ナングシク遺跡群（同左）において範囲確認調査を実施した。

平成21年4月13日より安和与那川原遺跡の調査対象範囲において7箇所のトレンチを設けて現地調査に着手し、同年5月1日に調査を終えた。同年5月7日からは、まちなか市営住宅建設予定地においてトレンチを4箇所設けて現地調査に着手した。同月29日に現地調査を終えた。同年8月には溝原貝塚の範囲内において個人住宅建設における文化財の有無照会がなされたため、範囲確認調査に伴う調整に関係者を行い、同年8月24日に試掘坑を3箇所設けて現地調査に着手し、同日埋め戻しを行い現地調査を終えた。

平成21年度より、ナングシク遺跡群の史跡指定に向けた地形測量調査を進めることとなった。そのため、平成21年11月21日に測量業務委託のための入札を行い業者を決定し、同月25日に契約を締結した。翌26日より着手され、平成22年3月29日に納品された。同日に検収を行い業務を完了し、平成21年度の調査を終えた。



1. 名護貝塚発掘作業風景



2. 名護貝塚調査風景

写真 3. 平成21年度調査風景

平成 21(2009) 年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
諸準備	■ 名護貝塚 ■ 清原貝塚 ■ ナングシク遺跡群											
文化財調査	■ 安和与那川原遺跡 ■ 名護貝塚 ■ 清原貝塚 ■ ナングシク遺跡群											
資料整理	■											

平成 22 年度

当該年度における調査では、前年度に引き続きナングシク遺跡群と羽地間切番所跡（羽地地区）の 2 遺跡において範囲確認調査を実施した。

平成 22 年 4 月に当市建設部建設計画課より親川住宅建設予定地において埋蔵文化財の有無照会がなされ、その予定地近隣に羽地間切番所跡が位置していることや、その周辺に遺跡が多く分布していることから、範囲確認調査を実施する運びとなった。調整の結果、同年 4 月 26 日より市営住宅建設予定地において試掘坑を 5 箇所設けて現地調査に着手し、同年 5 月 6 日に埋め戻しを行い現地調査を終えた。同年 7 月 27 日にナングシク遺跡群における地形測量委託業務の入札を行い、同月 30 日に契約を締結した。同日より着手され、同年 9 月 30 日に納品された。同日検収を行い、平成 22 年度の調査を終えた。



羽地間切番所推積状況

写真 4. 平成 22 年度調査風景

平成 22(2010) 年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
諸準備	■ 羽地間切番所跡 ■ ナングシク遺跡群											
文化財調査	■ 羽地間切番所跡 ■ ナングシク遺跡群											
資料整理	■											

平成 23 年度

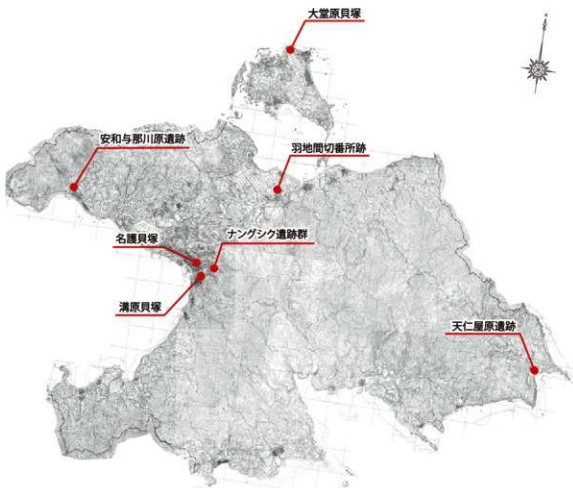
当該年度は、平成 21 ～ 22 年度に引き続きナングシク遺跡群の測量調査及び大堂原貝塚の範囲確認調査を実施した。平成 23 年 6 月に宇済井出におけるリゾート施設開発に伴う埋蔵文化財の有無照会がなされた。照会地に大堂原貝塚が一部含まれていたことから、同年 7 月に開発原因者と調整を行い、同年 9 月 5 日より現地調査に着手した。開発予定地において計 24 箇所の試掘坑を設けて調査を実施し、平成 24 年 2 月 10 日までに埋め戻しを行い調査を終えた。また、平成 23 年 10 月 26 日にナングシク遺跡群における地形測量委託業務の入札を行い、同年 11 月 1 日に契約を締結した。同日より着手され、平成 24 年 3 月 30 日に納品され、同日検収を行い、キャンプ・シュワブ内文化財調査を除く平成 23 年度の調査を終えた。



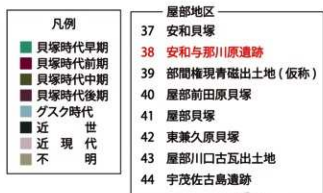
1. 大堂原貝塚伐採作業風景

2. 大堂原貝塚發掘作業風景

写真5. 平成23年度調査風景

[illegible]

第1図 調査実施遺跡位置図



※赤字は新規発見の遺跡

第2図 名護市の遺跡分布図

屋我地地区

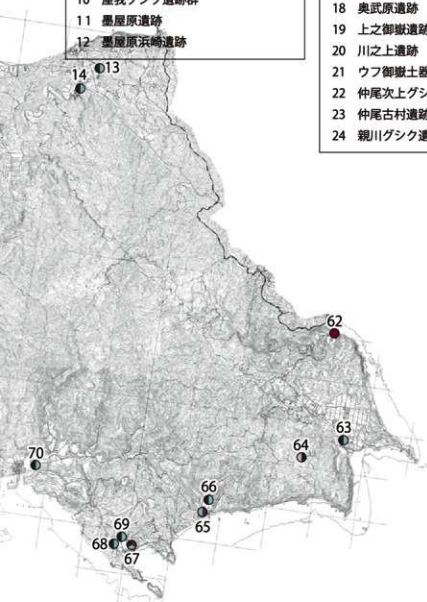
- 1 運天原サバヤ貝塚
- 2 タキギター河口遺物散布地 (仮称)
- 3 済井出長佐久貝塚
- 4 大堂原貝塚
- 5 ハンタジ遺跡 (仮称)
- 6 大堂浜遺物散布地 (仮称)
- 7 饒平名シマヌハー御嶽遺跡群
- 8 ナンマー貝塚
- 9 アマグシク東方遺物散布地 (仮称)
- 10 屋我グシク遺跡群
- 11 墨屋原遺跡
- 12 墨屋原浜崎遺跡

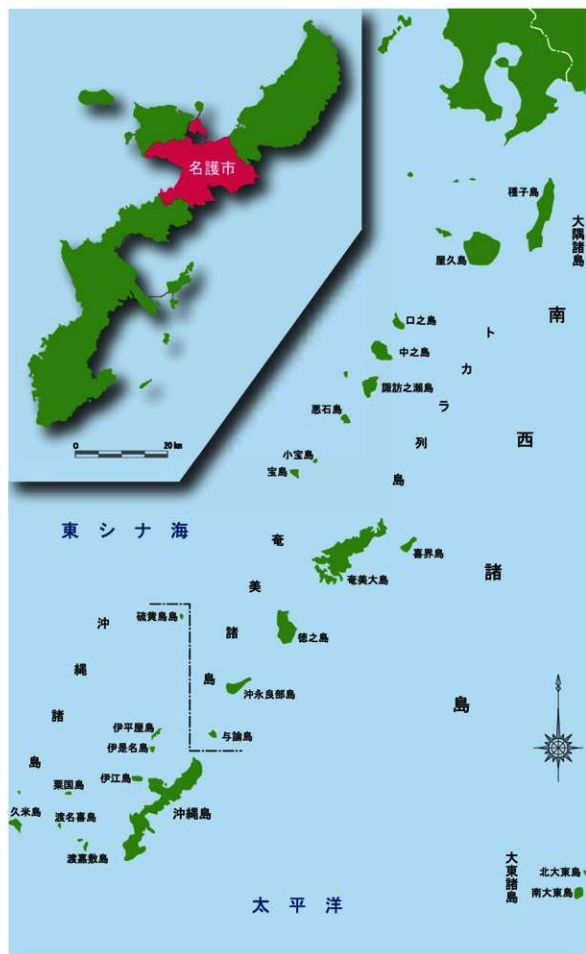
羽地地区

- | | |
|--------------------|------------------|
| 13 瀬洲村跡遺跡 | 25 羽地間切番所跡 |
| 14 源河大グシク遺跡 | 26 仲間遺跡 |
| 15 真喜屋平田遺物散布地 | 27 田井等遺跡 |
| 16 真喜屋阿社義遺物散布地 | 28 ヤトバラ殿遺跡 |
| 17 阿波茶部遺物散布地 | 29 デーグシク遺跡 |
| 18 奥武原遺跡 | 30 フガヤ遺跡 |
| 19 上之御嶽遺跡 | 31 谷田遺跡 |
| 20 川之上遺跡 | 32 川上遺跡 |
| 21 ウフ御嶽土器出土地 (仮称) | 33 親グシク遺跡 |
| 22 仲尾次上グシク遺跡 | 34 振慶名遺物散布地 (仮称) |
| 23 仲尾古村遺跡 | 35 伊差川古島遺跡 |
| 24 親川グシク遺跡 (羽地グシク) | 36 古我知焼窯跡 |

久志地区

- 62 有津遺跡
- 63 天仁屋原遺跡
- 64 ハサマ遺跡
- 65 嘉陽貝塚
- 66 嘉陽原遺跡
- 67 安部貝塚
- 68 北上原遺跡
- 69 上之島遺跡
- 70 嘉手苅村遺跡
- 71 思原遺跡
- 72 思原長佐久遺物散布地 (仮称)
- 73 思原石器出土地 (仮称)
- 74 大又遺跡
- 75 ヤニバマ遺物散布地 (仮称)
- 76 大浦崎収容所跡
- 77 美謝川集落関連遺跡群
- 78 大川田原遺跡
- 79 久志貝塚
- 80 上里グシク遺跡 (久志グシク)
- 81 久志古島遺跡
- 82 前田原水田遺跡
- 83 久志大川上流域生産遺跡





第3図 沖縄本島及び名護市位置図

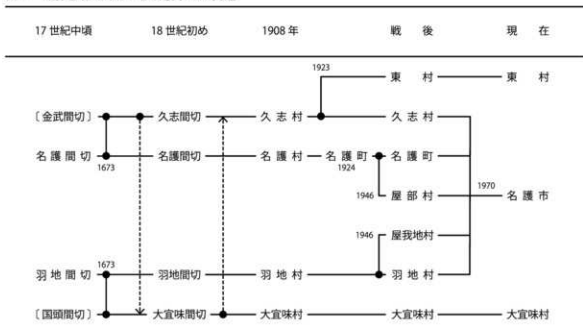
第Ⅱ章 調査地域の位置と環境

第1節 名護市の位置と地勢

名護市は、沖縄本島北部に位置し、昭和45(1970)年8月1日に旧名護町・屋部村・羽地村・屋我地村・久志村の1町4村が合併し誕生した。市域の北東部は大宜味村と東村、西部は今帰仁村と本部町、南部は恩納村と宜野座村の1町5村に隣接している。県都那覇市から北に約64kmの距離にあり、国道58号、国道329号及び沖縄自動車道によって結ばれている。沖縄の空の玄関口である那覇空港からは、沖縄自動車道を使用して車で約1時間を要する。総面積は210.37km²(平成24年12月29日現在)で、県内でも竹富町(334.02km²)、石垣市(229km²)に次ぐ面積を誇り、その約60%を山林が占める。市域の西部は険しい山々を有する屋部地区、北部は稲作で知られた羽地地区や塩田で知られた屋我地地区、東部は山間部が美しい久志地区、中央部には平野と丘陵が広がる名護地区と変化に富んだ景観を有する地域からなる自然豊かな市である。市域の中央には、名護岳(標高345.2m)を中心に標高300m級の山々が連なり起伏の大きい丘陵地を構成し、そこに降った雨を集めて源河川、羽地大川、我部祖河川、汀間川、大浦川等の中小の多くの川が流れる。山間部から流れてきた川の河口付近には沖積平野が形成され、そこに集落が形成される。この集落の後背湿地は、近世以降水田として利用され、山、海とともに個性豊かな山原型の土地利用が形作られてきた。

人口は約61,659人、世帯数は約26,928世帯を数え(平成24年12月29日現在)、55行政区から構成されている。

表1 名護地域の関切から名護市への変遷



第2節 名護市の地理・自然的環境

本市の地形は大きく①本部半島部、②脊梁山地部、③両者に挟まれた丘陵地域と屋我地地域の3つに分けることができる。

本部半島部は、嘉津字岳(標高448m)、八重岳(標高453m)、安和岳(標高432m)

等の本部半島にある高い山々を含む地域である。この地域は、表層地質が古い時代の地層で構成されるため、谷が発達し山々の傾斜が大きい地形を形成する。表層地質は、灰色石灰岩、チャート、黒色千枚岩～黒色頁岩を主体とした古生代二疊紀～中生代末期の本部層や与那嶺層、湧川層が分布する。

脊梁山地部は、名護岳（標高 345.2 m）、多野岳（標高 385.2 m）、久志岳（標高 335 m）、辺野古岳（標高 332 m）等の沖縄島の脊梁山地を形成する地域である。辺野古区もこの地域に含まれる。この脊梁山地を形成する沖縄島の島軸は、北東～南西の軸を持ち、山々や丘陵の高さにおいて北側に高く、南側に低い傾向がある。この地域は国頭層群（名護層、嘉陽層）からなる地形であるが、局部的に国頭礫層で構成される段丘面の発達が見られる。その傾向は東海岸において顕著である。段丘面より海側では、山地が海岸へ急角度で接するが、この高さも北側では急斜面をなし、南側に行くほど傾斜は弱くなる。表層地質は、黒色頁岩～黒色千枚岩、緑色岩類、褐色砂岩層や黒色頁岩層を主体とする名護層や嘉陽層が分布する。

丘陵地域と屋我地地域は市の西部に広がるなだらかな低い丘陵を形成する地域に屋我地島を加えた地域である。丘陵地域は、本部半島部の古い時代の岩石と脊梁山地部を作る国頭層群との間を埋めるように堆積した礫層を中心としたなだらかな低い丘陵で名護地峡を形成している。我部祖河～振慶名～田井等に広がる平野は、古くから人工的な土地の平坦化が行われ、水の豊かな水田帯として「ハネジターブックワ」と呼ばれた。表層地質は、呉我礫層や国頭礫層が表層地質の主体となって分布し、局所的に仲尾次砂層、琉球層群の那覇石灰岩や石灰質砂層等が見られる。さらには与那嶺層と見られる千枚岩や石灰岩が宇茂佐に見られる。また、屋我地地域では、与那嶺層の千枚岩や石灰岩、チャート等が見られる。

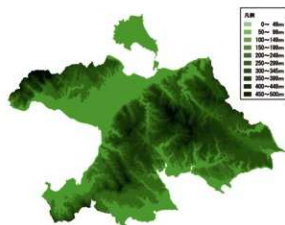
第3節 名護市の歴史的環境

市内には、現在までに約 80 箇所の埋蔵文化財が確認されている。これまでの考古学上の調査成果から、本市の歴史は沖縄貝塚時代早期前葉（約 7,000 ～ 5,000 年前）まで遡ることができる。本市における現存資料で最古のものは、大堂原貝塚から出土した爪形文土器で約 6,600 年前に位置づけられている。爪形文土器は県内においても最古級の土器で、その系譜については縄文時代草創期（約 10,000 年以上以前）の爪形文土器を祖型とする見解もあるが、県内出土のものは約 4,000 年以上の時代の開きがあることなどが指摘されている。また、大堂原貝塚では爪形文土器よりも下層において野国第 4 群土器と仮設されている無



第4図 名護市における地形大区分

※宮城 勉「名護市の地形」『名護市の自然』2003 より抜粋、再トレース



第5図 名護市の標高分布高度

文土器が出土し注目を集めたことは記憶に新しい。大堂原貝塚が所在する屋我地島は、墨屋原遺跡や運天原サバヤ貝塚、墨屋原浜崎遺跡など貝塚時代に属する遺跡が最も多く分布する地域である。特に縄文時代に相当する貝塚時代早期～中期の遺跡についてみると、そのほとんどが屋我地島に集中している。その要因のひとつとして海的环境が考えられる。先史時代の主な生業は、発達したサンゴ礁のイノー（浅海）や内湾の海に生息する多様な貝類や魚類を獲物とした漁労活動を主体とした狩猟採集の時代であった。名護湾（一部地域を除く）や羽地内海、大浦湾など市域の海岸ではあまりサンゴ礁の発達がみられないため、サンゴ礁の発達がみられる屋我地島が集落適地として選択され続けたことがうかがい知れる。部瀬名南遺跡や屋部前田原貝塚、有津遺跡などの屋我地島以外に分布する貝塚時代早期～中期遺跡についても同様に遺跡前面にはサンゴ礁のイノーが形成されている。弥生時代～平安時代並行期に相当する貝塚時代後期になると、屋我地地域以外の地域においても遺跡が分布するようになる。遺跡数も急増することから、県内の他地域と同様に本市においても人口の増加や人の定住化が進んでいたことがうかがえる。ただし、羽地地区においては先史時代を通して奥武原遺跡のみしか確認されていない。県内における先史時代の遺跡の立地は海岸砂丘（貝塚時代早期）→琉球石灰岩台地縁辺部・崖下・岩陰（貝塚時代早期～前期）→琉球石灰丘陵（貝塚時代前期）→琉球石灰岩台地（貝塚時代中期）→海岸砂丘（貝塚時代後期）と変遷しているが、本市に分布する遺跡はほぼ海岸砂丘地や平地に分布する。

グスク時代以降になると、羽地地区に遺跡が集中する傾向にある。このことは、先史時代の遺跡が極端に少ないこととあわせて本市の遺跡分布の大きな特徴のひとつとなっている。グスク時代の遺跡の大半は近世まで続き、その上に現在の集落が形成される例が多くみられる。遺跡が集中する羽地地区、とくに仲尾～振慶名にかけての遺跡は、親川グスクを中心にして周囲のマタ（谷頭）内に分散して立地しており、グスク時代に形成された集落跡と考えられる。また、我部祖河～振慶名～田井等に広がる平野は、古くから人工的な土地の平坦化が行われ、「ハネジターブクワ」として知られた美田地帯であった。この平野の西端に位置する丘陵では近世を代表する焼物である古我知焼の窯跡があり、約170年前まで操窯していた。他の地域に目を移してみると、市域において最大の規模を誇るナングシクは、名護按司の居城と伝えられ、名護の発祥の地とされる。名護按司が歴史書に登場するのは、尚巴志が今帰仁グスクを攻略した際にその名がでてくる。その際に羽地按司の名もみられる。ナングシクのある丘陵地にはグスクを中心に集落が形成されていたが、16世紀の尚真王の中央主権政策により名護按司及びその家臣が首里へ引き上げると、人々は山を下りて周辺の平地へ移住していった。また、屋部及び宇茂佐の発祥の地として知られる宇茂佐古島遺跡からは、高麗系瓦や南蛮陶器、青磁、沖縄産陶器などが出土している。また、遺跡沿いに流れる屋部川河口には屋部川口古瓦出土地があり、そこから高麗系瓦が採集されている。『名護六百年史』によると、「屋部港の津口を唐船曲りと呼び十五六反帆の唐船を繋留することができた」とあることから、13～14世紀頃から屋部川河口は良港として利用されていたことがうかがえる。久志地区においては、羽地地区と同様にグスク時代以降の遺跡が増加する傾向にある。当該期の遺跡は現在の集落に隣接するようにして分布している。なお、市域において現在までに確認されているグスク（周知の遺跡以外のものも含む）は11箇所、その大半が御嶽などとして現在も祭祀などを行う場として利用されている。

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 調査区及びグリッドの設定

今回の調査では、周知の遺跡の範囲内及び周辺地域において開発が計画されている地区を中心に範囲確認調査を実施した。今回の調査では、安和与那川原遺跡(屋部地区)、名護貝塚(名護地区)、溝原貝塚(同左)、天仁屋原遺跡(久志地区)、羽地間切番所跡(羽地地区)、大堂原貝塚(屋我地地区)の6遺跡において試掘調査を実施し、ナングシク遺跡群において地形測量調査を実施した。

調査におけるグリッド設定は、名護市域を交差する座標軸(X・Y軸)を5km毎のグリッドに区切り第Ⅰ区画とし、階層的に第Ⅴ区画まで設定した(第6図参照)。ただし、調査地の立地や形状によっては、その場に応じて任意のグリッドを設定した。

第2節 調査の方法

1. 試掘調査

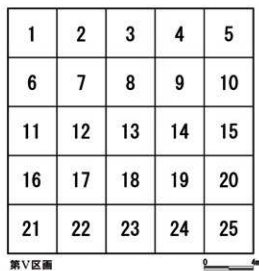
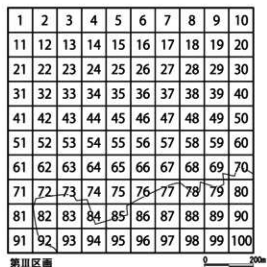
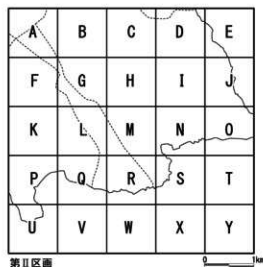
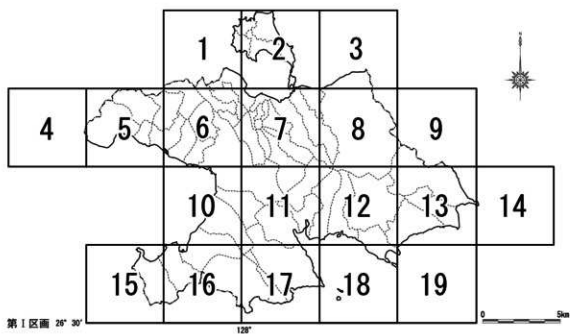
試掘調査を実施するにあたり、開発予定において遺跡の広がりを確認するために遺物包含層及び遺構の残存状況を確認することに主眼を置いて調査を進めた。基本として開発予定地の四隅ないし両端及び中央部に数箇所の試掘坑を設けて試掘調査を実施した。試掘坑設置のためにまず第Ⅴ区画のグリッドを設定し、そこに1m×4mを最小単位とする試掘坑を設置した。試掘坑を設置する際には、必要に応じて雑草雑木の除草・伐採を行った。また、開発予定地に既存の建物がある場合は、可能な限り担当者立会いのもと解体を行いその後調査に着手した。試掘坑における表土及び客土の除去は、基本的に重機を用いて行うこととしたが、重機の搬入が困難な場所については人力による除去を行った。表土及び客土の除去後に遺物包含層が確認された場合は、人力による掘削に切り替えて遺物及び遺構の検出を行うこととした。また、遺物が検出された場合は、グリッド単位で層序ごとに取り上げることとした。

掘削を終えた試掘坑においては、1/10スケールを基本とする壁面実測を行い、その後土壌サンプルを各層ごとに採取し埋戻しを行った。採取した土壌サンプルについては、現場調査終了後に必要に応じて自然科学分析を外部委託した。

写真撮影については、試掘坑設定後や掘削後、壁面清掃後及び土壌サンプル採取後などにその状況を35mmカメラ(白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルム)及びデジタル一眼レフカメラ(RAW及びJPEG)にて撮影した。また、必要に応じてその都度写真撮影を行った。また、遺構が確認された場合は、遺構の全景及び近景を可能な範囲で撮影した。

2. 地形測量調査

今回の調査では、ナングシク遺跡群において地形測量を外部委託により実施した。この地形測量は、平成26年度以降に計画しているナングシク遺跡群の史跡整備事業に資する地形図を作成することを目的とし、今後の調査に資するための基準点の打設も同時に実施した。地形図を作成するにあたって、縮尺は1/250とし、等高線の間隔は0.5mまで表示することを基本とした。但し、等高線の間隔が0.5mで表現しきれない細やかな地形がある場合には、その部分は補助として0.25mまで表示するものとした。また、地形図には地籍図を併合し、あわせて土地登記簿調査も実施した。



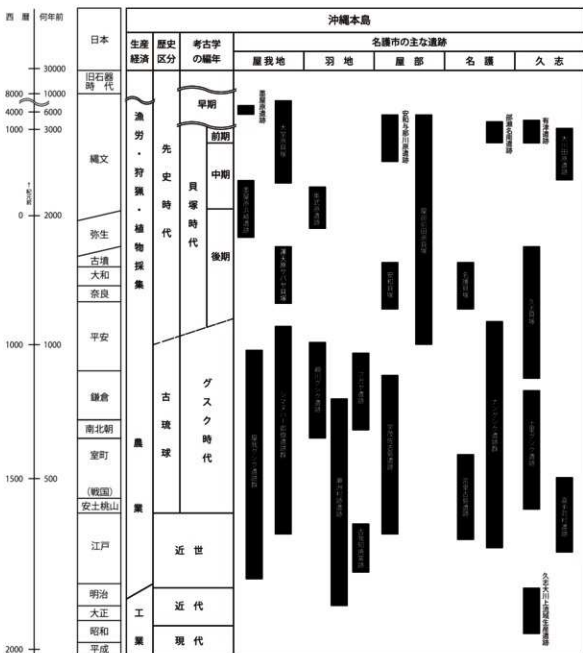
第6図 地区割

第3節 時代区分について

沖縄における先史時代・グスク時代の時代区分については、これまで色々な時代区分案が提起され議論されてきたが、未だ確立していない状況にある。そのため、本報告書では、従来の旧石器時代―貝塚時代（沖縄現行編年）―グスク時代―近世―近代―現代の時代名称で統一し、各時代の時期区分については、貝塚時代を早期―前期―中期―後期に区分した。この時代区分は、本市教育委員会がこれまで公に使用してきた区分であり、一貫性を持たせることで市民に理解しやすいものと思われることから今回採用するに至った。

なお、グスク時代は12世紀～島津侵攻(1609)まで、近世は島津侵攻後～琉球処分(1879)まで、近代は明治時代～沖縄戦(太平洋戦争)までとしている。

表 2 時代区分表



※『名護市文化財調査報告-4 名護市の遺跡(2) 分布調査報告』1982を基に作図

第IV章 調査結果

前述したように、今回の調査では、安和与那川原遺跡をはじめとする6遺跡で試掘調査を実施し、ナングシク遺跡群において地形測量調査を実施した。

以下、各遺跡ごとに概要及び調査結果を述べる

第1節 試掘調査

今回の調査では周知の遺跡の範囲及び近隣地において開発が計画されている遺跡において試掘調査を実施した。

1. 安和与那川原遺跡 (NYbAyl)

所在地：安和与那川原

立地：砂丘

時代：貝塚時代前期

遺跡の概要

当初は安和貝塚の範囲に含まれるとみられていた地域において、平成18年度に実施した試掘調査で貝塚時代前期土器（嘉徳Ⅰ式B土器など）が確認され、翌平成19年度の市内遺跡詳細分布調査の結果によって新発見の遺跡と判断された。

遺跡は、与那川の河口より約400m内陸に位置する砂丘上に立地し、砂丘の背後に



第7図 安和与那川原遺跡位置図

は嘉津宇岳が鎮座する。現在のところ、与那川より西側において遺跡が分布していると思われる、貝塚時代前期を代表する伊波式土器や萩堂式土器などのほか、嘉徳Ⅰ式B土器などの奄美地域との交流をうかがわせる遺物も出土している。

また、遺跡の東側を流れる与那川には市指定文化財候補の「安和の石橋」が架かる。

調査の概要

安和与那川原遺跡では、その発見の契機ともなった砂防事業が計画されていることから遺跡の範囲確認を目的とした試掘調査を平成19～21年度にかけて実施した。調査は与那川沿いの安和752番、756番、758番、760番、763番において実施した。本書では、便宜上、調査実施順に1～3地区（第8図参照）として報告する。

1地区は、平成18年度に実施した試掘調査において貝塚時代前期土器が出土した地点で、遺物包含層の残存状況が良好とみられる地区である。地区内に設けた4箇所の試掘坑全てにおいて、貝塚時代前期に属するとみられる遺物包含層を2枚確認することができた。遺物包含層からは伊波式土器や萩堂式土器などの沖縄諸島周辺において使用された土器のほか、嘉徳Ⅰ式B土器などのように主に奄美諸島において使用されていた土器型式も出土している。

2地区は、1地区より100m程南側に位置する。本地区においては3箇所の試掘坑を設けて調査を実施したが、1cm程度の小破片の土器片が出土しただけで、遺物包含層を確認することはできなかった。本地点で出土した土器片の量は、遺跡の隣接地ならば散布しうる

量の範疇に収まるものとみられることから、遺跡の範囲から外れるものと考えられる。

3地区は、1地区と2地区の間に位置する地区で、7箇所の試掘坑を設けて調査を実施した。調査の結果、2枚の遺物包含層とみられる地層を確認することができたが、陶磁器や鉄製品などが共伴することから攪乱を受けているものと思われる。出土した遺物は無文の土器（胴部）が大半を占める。土器の特徴から貝塚時代前期～後期に属するものとみられる。



1. 1地区調査前風景



2. 1地区調査区全景



3. 1地区推積状況



4. 2地区調査区全景



5. 2地区推積状況



6. 3地区調査区全景

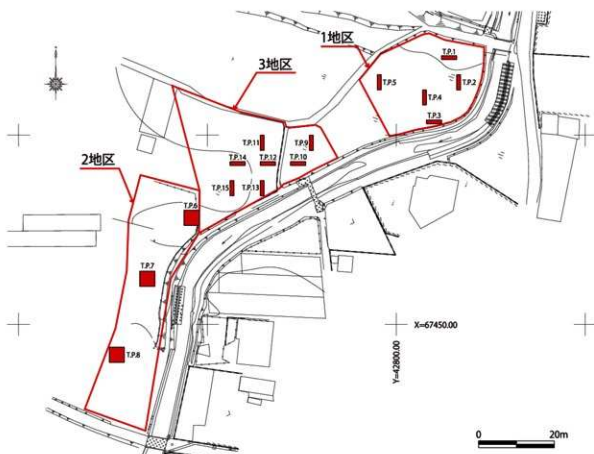


7. 3地区推積状況

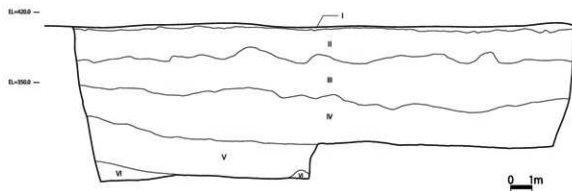


8. 市指定文化財候補「安和の石橋」

写真 6. 安和与那川原遺跡調査状況

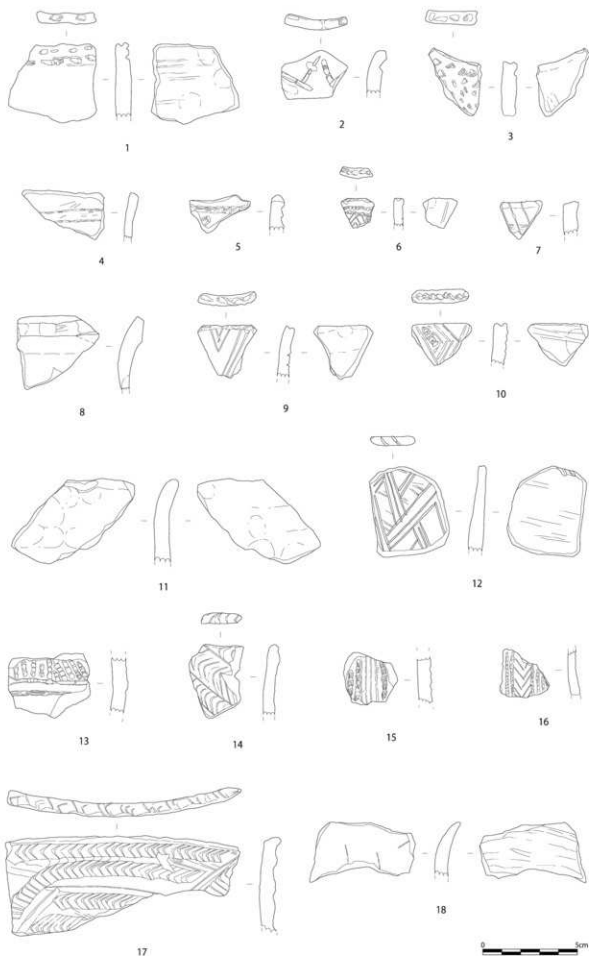


第8図 安和与那川原遺跡調査範囲及び試掘坑位置図

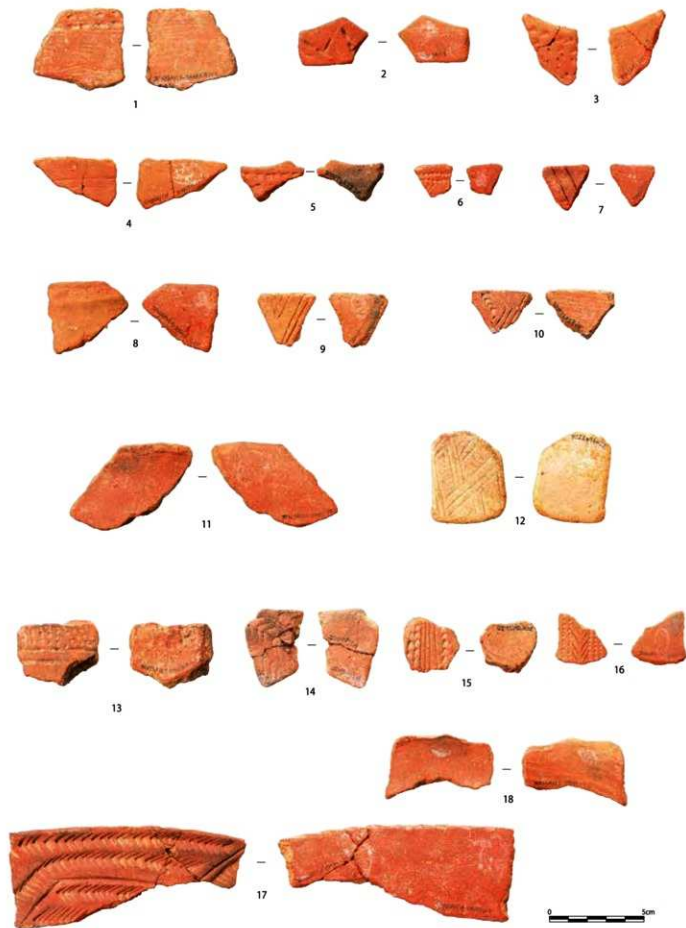


- I層：灰褐色（7.5YR4/2）土層。表土。腐植土。
 II層：褐色（10YR4/4）混礫土層。粘質。粒の細かい礫、枝サンゴ、貝殻を少量含む。
 III層：にぶい黄褐色（10YR4/3）混砂土層。粘質。砂の混入は微量。礫、枝サンゴ、貝殻を含み、II層より若干締まる。
 IV層：暗褐色（7.5YR3/4）混砂土層。粘質。固く締まり、礫を多く含む。貝殻やサンゴもみられる。遺物包含層。
 V層：暗褐色（7.5YR3/3）混土砂層。やや粘質。貝殻やサンゴ及び礫を含む。遺物包含層。
 VI層：褐色（7.5YR4/4）砂層。

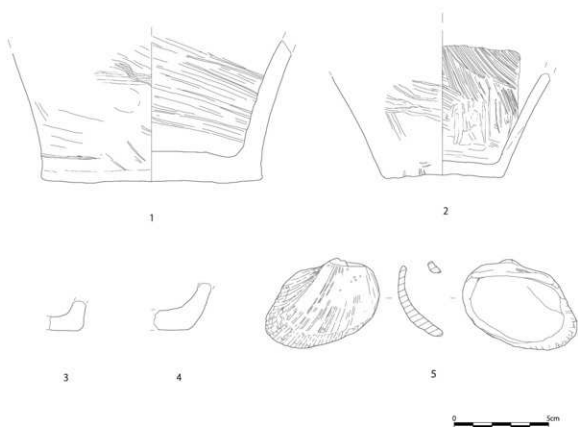
第9図 安和与那川原遺跡試掘坑壁面



第10图 安和与那川原遺跡出土土器 (S=1/2)



図版 1. 安和与那川原遺跡出土土器



第 11 図 安和与那川原遺跡出土土器及び貝製品 (S=1/2)



図版 2. 安和与那川原遺跡出土土器及び貝製品

[illegible]

検出番号 取附番号	種別	異種	L/R	質量				直径(mm)		観察事項	出土地点/層
				部径(mm)	部長(mm)	部幅(mm)	重量(g)	縦	横		
第11期 異種2-5	異種	リュウキュウサルボウ	L	43	55	24	27	24	17	リュウキュウサルボウの殻蓋部に内部から断片を穿つ、全体的に磨耗し、変色が著しい。	TP4 群衆

2. 名護貝塚 (NNNK)

所在地：大^{おおな}中
立地：砂丘
時代：貝塚時代後期

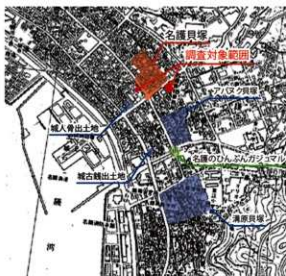
遺跡の概要

名護十字路北側一帯の市街地に分布し、埋立前の海岸線から北東へ約300m内陸に位置する。周辺にはナングシク遺跡群、溝原貝塚、アバヌク貝塚などの遺跡が約10箇所分布しており、名護湾をひかえたこの一帯が当時好適な生活環境であったことがうかがえる。現在では市街地化が進み、当時の海岸線や砂丘の状況を示す地形が消滅しつつある。名護貝塚は、古くから貝塚時代後期の遺跡であることが知られていたが、諸開発などによってほとんど壊滅状態であると考えられていた。しかし、昭和60年に本市教育委員会及び沖縄県教育委員会が実施した発掘調査によって、僅かではあるが未攪乱の遺物包含層が確認されている(名護市教育委員会1985)。遺物包含層からは、くびれ平底など貝塚時代後期の特徴を有する土器などが出土している。また、年代特定には至っていないが埋葬人骨が検出されている。

調査の概要

名護貝塚隣接地において本市が計画する中心市街地商業基盤等整備事業(名護市営市場建設)及びまちなか市営住宅建設事業に係る埋蔵文化財の有無照会がなされたことから、平成20年度及び平成21年度において範囲確認調査を実施した。本書では、便宜上、調査実施年度順に1地区、2地区として報告する。

1地区は、名護十字路からバスターミナル向け(北西側)に約50m進んだ県道84号線(旧県道116号線)沿いに位置し、昭和60年度に沖縄県教育委員会が実施した発掘調査において攪乱を受けているものの遺跡の広がりが確認されたトレンチと歩道を隔てて隣接する。対象範囲において4箇所の



第12図 名護貝塚位置図



1. 1地区調査区全景



2. 1地区堆積状況

写真7. 1地区調査状況

試掘坑を設けて調査を実施したが、遺物包含層を確認することはできなかった。また、出土した遺物は土器及び古銭が各1点のみで、その他は近現代の陶磁器や赤瓦であった。以上の結果から、歩道より南西側（海側）への遺跡の広がりはないものと判断される。

2地区は、名護十字路を国頭方面（北東側）へ約60mの県道71号線（旧国道58号）沿いに位置し、昭和60年度に本市教育委員会が実施した発掘調査が行われたトレンチと車道を隔てて隣接する。1地点からは東へ約100mの距離にある。対象範囲において試掘坑を4箇所設けて調査を実施したが、貝塚時代後期に属するとみられる土器片が出土したものの同じ層から近現代の陶磁器や瓦などの出土が確認された。そのことから、全体的に攪乱を受けているものとみられ、過去の住宅及び店舗建設などによって遺跡は破壊されているものと判断される。また、今回の調査において珊瑚石で構築された井戸跡が検出された。構築時期を断定するには至らなかったが、井戸の構造などを観察することができることから、記録保存を行った。



1. 井戸跡半截状況



2. 2地区調査区全景

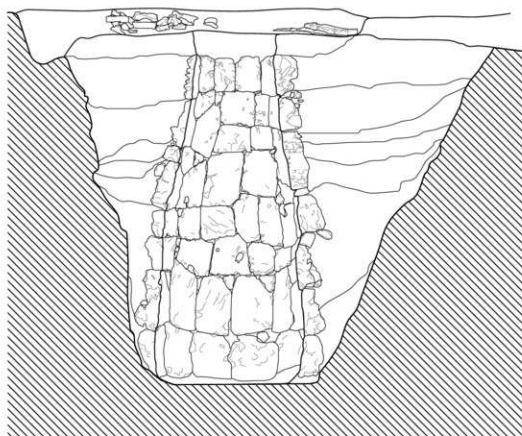
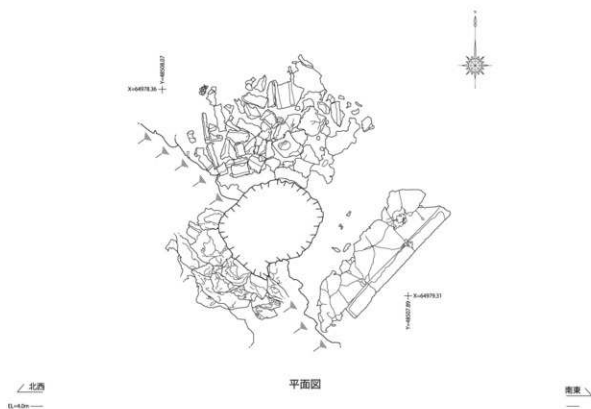


3. 2地区堆積状況

写真 8. 2地区調査状況



第13図 名護貝塚調査範囲及び試掘坑位置図



0 1m

第 14 図 井戸跡実測図

3. 天仁屋原遺跡 (NKTI)

所在地：天仁屋天仁屋原
立地：段丘上台地
時代：グスク時代～近世

遺跡の概要

旧天仁屋公民館跡地（現在広場）の南東側にある神アサギやニガミヤーなどの坪所のある広場一帯に分布する天仁屋部落の歴史を語る上で貴重な遺跡である。遺跡のすぐ南側は崖になっており、天仁屋川の谷に続いている。広場の周囲は道路造成により削土され、厚さ約20cmの遺物包含層が露頭している。遺跡は坪所を中心に残存しているとみられることから、遺跡全体の破壊はないが、道路造成による周辺部の削土や遊具の設置による部分的な攪乱がみられる。遺物包含層からは中国製陶器や染付、沖縄産陶器などが採集されている。

調査の概要

天仁屋原遺跡の近隣地において、本市が計画する天仁屋第2市営住宅建設に係る埋蔵文化財の有無照会がなされたことから、平成20年度に範囲確認調査を実施した。

照会地は、遺跡のある広場の東側の道路を約160m下った北側の道路沿いに位置し、調査当時はサトウキビ畑として使用されていた。

対象範囲において、2箇所の試掘坑を設けて調査を実施した。両試掘坑とも、地表面下約60～70cmの深さで嘉陽層が露頭し、重機による掘削痕などが確認された。そのため、当該地は開墾された後に耕作土を客土しサトウキビ畑を営んでいたものと推測される。また、遺物及び遺物包含層を確認することができなかったことから、遺跡の範囲は当該地までは及んでいないものと判断される。



第15図 天仁屋原遺跡位置図



1. 調査地近景

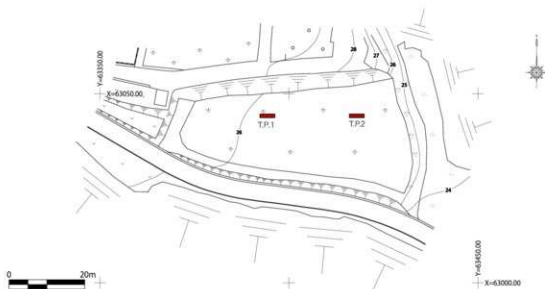


2. 試掘坑設置状況



3. 増補状況

写真9. 天仁屋原遺跡調査状況



第 16 図 天仁屋原遺跡調査範囲及び試掘坑位置図

4. 溝原貝塚 (NNMK)

所在地： あがりえ 東江
立地： 砂丘
時代： 貝塚時代後期

遺跡の概要

名護博物館から東江公民館一帯にかけて分布するとみられる遺跡で、かつての海岸線である国道 58 号より約 300m 内陸に位置しており、南西側から北東側にかけては名護岳の裾野にあたる丘陵地帯になっている。過去、博物館敷地内において発掘調査が行われているが、未撹乱の遺物包含層は確認されていない（名護市教育委員会 1989）。

名護博物館の敷地は、名護間切番所時代から現在に至るまで利用され続けていることから撹乱が進んでいるものとみられる。また、周囲も住宅密集地となっていることから、遺跡の破壊が懸念される。



第 17 図 溝原貝塚位置図



第 18 図 溝原貝塚調査範囲図

調査の概要

貝塚の範囲内において個人住宅の建設が計画されていたため、建設予定地において範囲確認調査を実施した。調査地点は博物館から南へ約80mの位置にある。調査地において試掘坑を3箇所設けて調査実施した結果、土器片1点と近現代のものとみられる陶磁器や瓦などが出土した。出土した土器片は小破片であるため時代の特定には至らなかったが、溝原貝塚の範囲内であることから貝塚時代後期に属する土器である可能性が高いものとみられる。しかし、各試掘坑において未撹乱の遺物包含層がみられないことや先史時代の遺物が僅か1点であることなどから、過去の住宅建築などによって当該地における遺跡は破壊されている可能性が高いと思われる。



1. 調査区近景



2. 堆積状況

写真 10. 溝原貝塚調査状況

5. 羽地間切番所後 (NH-B)

所在地：親川イバザス
立地：丘陵地
時代：グスク時代～近世

遺跡の概要

親川集落北側の小丘陵地上に立地する。羽地間切番所は、17世紀に設置されたといわれ、明治34年に仲尾次へ移転するまで建物が建っていたようである。昭和60～61年度にわたって実施された発掘調査では、階段状に三段積の石垣が確認されている（名護市教育委員会1988）。伝承では、親川グスクの石垣を運んで石垣を築いたといわれ、建物は瓦葺きであったようである。また、調査によりグスク時代の遺物包含層や13～19世紀前半の中国製青磁などが確認されていることから、番所が設置される以前から人々が住んでいたとみられる。羽地間切番所は、1735年の羽地大川改修工事の宿舎として利用されたり、国頭地方の中央役所及び警察署の設置、羽地高等学校分校教場が設置されていることなどから、当遺跡は羽地の歴史上重要な場所であるといえる。

調査の概要

羽地間切番所跡の近隣地において、本市が計画する親川市営住宅建設に係る埋蔵文化財の



第19図 羽地間切番所跡位置図

有無照会がなされたことから、平成 22 年度に範囲確認調査を実施した。

調査対象地は、羽地間切番所跡から南へ約 110m の平野部に位置する。調査対象地において 5 箇所の試掘坑を設けて調査を実施した結果、近現代のものとみられる陶磁器や瓦などが出土したが、羽地間切番所跡の時代に属する遺物の出土は認められなかったことから、遺跡の範囲は当該地までは及んでいないものと判断された。また、T.P.1 からは加工されたサンゴ石が出土したが、コンクリート片が共伴するなど攪乱を受けていることや、地上部のみコンクリート製の古い井戸が近くにあることなどから、井戸を改修する際に破棄されたものと考えられる。



1. 調査区近景



2. サンゴ石検出状況

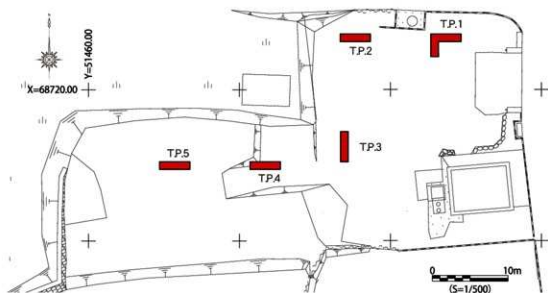


3. 堆積状況



4. T.P.1 北西側にある井戸

写真 11. 羽地間切番所跡調査状況



第 20 図 羽地間切番所跡試掘坑位置図

6. 大堂原貝塚 (NYgUK)

所在地： 済井出大堂原
 立地： 砂丘及び丘陵地
 時代： 貝塚時代早期～後期

遺跡の概要

昭和 54 (1979) 年に実施した遺跡分布調査で発見された遺跡で、古宇利島を望む北に開いた谷間に位置している。発見当初は、貝塚時代後期の遺跡とみられていたが、平成 10 (1998) ～ 15 (2003) 年度にかけて実施した古宇利大橋建設に伴う発掘調査から貝塚時代早期～後期にかけての複合遺跡であることが判明した。縄文時代に相当する貝塚時代早期～中期の層からは、県内でも最古級の土器である爪形文土器をはじめ、曾畑式土器や条痕文土器など豊富な種類の遺物が出土している。なお、爪形文土器よりも下層において爪形文土器に先行するものとみられる無文土器(野国第Ⅳ群土器)が出土している。また、弥生～平安時代並行期に相当する貝塚時代後期の層からは、在地土器のほか貝輪や甕棺の破片など九州地域との交流を示すような遺物も出土している。そして、貝塚時代後期の埋葬人骨や貝塚時代早期の人骨も検出されている。

調査の概要

大堂原貝塚の丘陵部においてリゾート施設建設が計画されていたことから、施設建設予定地において範囲確認調査を実施した。調査対象範囲において 26 箇所の試掘坑を設けて調査を実施した。丘陵の大部分は、以前は農地として利用されていて、その土地改良の影響によって地形改変が進んでいる。そのため、地表面を剥ぐと客土及び地山が露頭する状況であった。しかし、丘陵縁辺部の一部では石器が表面採集されたことや試掘坑から僅かではあるが土器が出土したことから遺物包含層が残存する可能性が高いと思われる。

また、北側の丘陵崖下に設けた試掘坑からは貝塚時代前期に属するとみられる土器



第 21 図 大堂原貝塚位置図



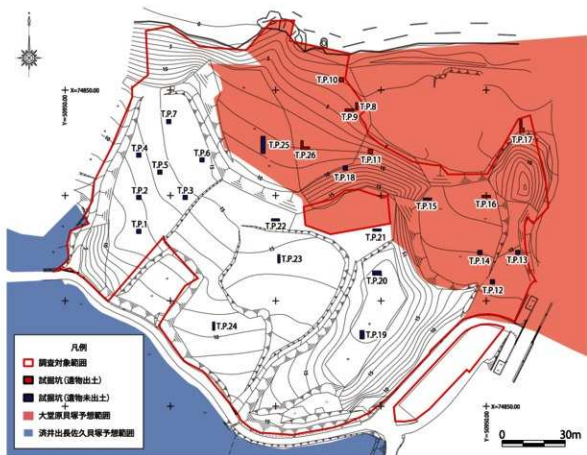
1. 崖下堆積状況



2. 丘陵上堆積状況

写真 12. 大堂原貝塚調査状況

が出土し、遺物包含層も確認することができた。今回の調査では、遺構を確認することができなかったことや崖下で石器や土器片が表面採集されたことなどから、丘陵上部からの流れ込みの可能性も考えられる。



第 22 図 大堂原貝塚調査範囲及び試掘坑位置図



第 23 図 大堂原貝塚試掘坑壁面

表 5 大堂原目掘出土器觀察表

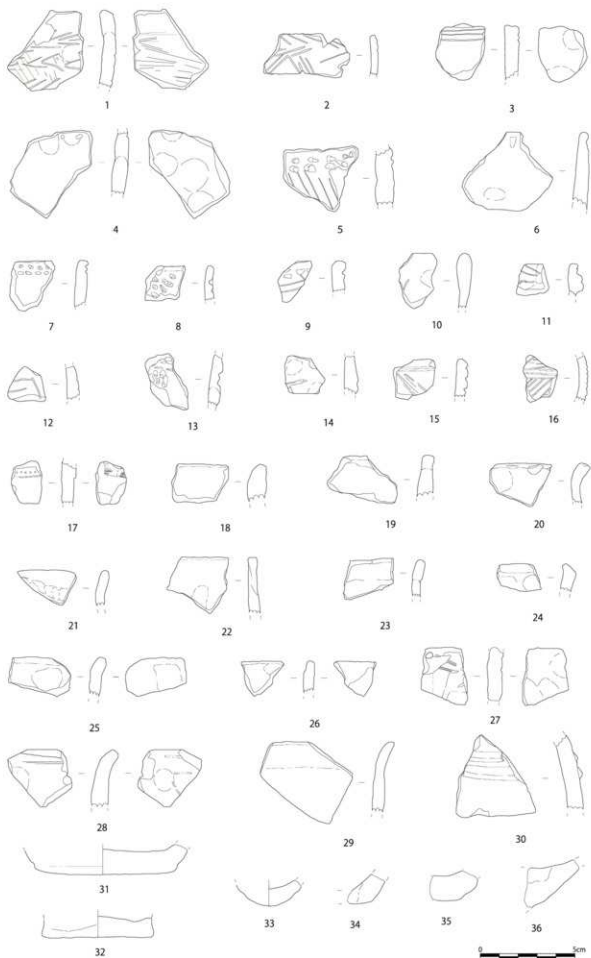
募集区分 募集年度	募集月/年	募集期	募集人数 （計画）	募集人数 （実績）	募集方法	募集要項	募集状況	募集率	募集額	募集単価	注記
募集区分1 募集年度1	募集月1 募集年度1	募集期1	募集人数1 （計画）	募集人数1 （実績）	募集方法1	募集要項1	募集状況1	募集率1	募集額1	募集単価1	
募集区分2 募集年度2	募集月2 募集年度2	募集期2	募集人数2 （計画）	募集人数2 （実績）	募集方法2	募集要項2	募集状況2	募集率2	募集額2	募集単価2	
募集区分3 募集年度3	募集月3 募集年度3	募集期3	募集人数3 （計画）	募集人数3 （実績）	募集方法3	募集要項3	募集状況3	募集率3	募集額3	募集単価3	
募集区分4 募集年度4	募集月4 募集年度4	募集期4	募集人数4 （計画）	募集人数4 （実績）	募集方法4	募集要項4	募集状況4	募集率4	募集額4	募集単価4	
募集区分5 募集年度5	募集月5 募集年度5	募集期5	募集人数5 （計画）	募集人数5 （実績）	募集方法5	募集要項5	募集状況5	募集率5	募集額5	募集単価5	
募集区分6 募集年度6	募集月6 募集年度6	募集期6	募集人数6 （計画）	募集人数6 （実績）	募集方法6	募集要項6	募集状況6	募集率6	募集額6	募集単価6	
募集区分7 募集年度7	募集月7 募集年度7	募集期7	募集人数7 （計画）	募集人数7 （実績）	募集方法7	募集要項7	募集状況7	募集率7	募集額7	募集単価7	
募集区分8 募集年度8	募集月8 募集年度8	募集期8	募集人数8 （計画）	募集人数8 （実績）	募集方法8	募集要項8	募集状況8	募集率8	募集額8	募集単価8	
募集区分9 募集年度9	募集月9 募集年度9	募集期9	募集人数9 （計画）	募集人数9 （実績）	募集方法9	募集要項9	募集状況9	募集率9	募集額9	募集単価9	
募集区分10 募集年度10	募集月10 募集年度10	募集期10	募集人数10 （計画）	募集人数10 （実績）	募集方法10	募集要項10	募集状況10	募集率10	募集額10	募集単価10	
募集区分11 募集年度11	募集月11 募集年度11	募集期11	募集人数11 （計画）	募集人数11 （実績）	募集方法11	募集要項11	募集状況11	募集率11	募集額11	募集単価11	
募集区分12 募集年度12	募集月12 募集年度12	募集期12	募集人数12 （計画）	募集人数12 （実績）	募集方法12	募集要項12	募集状況12	募集率12	募集額12	募集単価12	
募集区分13 募集年度13	募集月13 募集年度13	募集期13	募集人数13 （計画）	募集人数13 （実績）	募集方法13	募集要項13	募集状況13	募集率13	募集額13	募集単価13	
募集区分14 募集年度14	募集月14 募集年度14	募集期14	募集人数14 （計画）	募集人数14 （実績）	募集方法14	募集要項14	募集状況14	募集率14	募集額14	募集単価14	
募集区分15 募集年度15	募集月15 募集年度15	募集期15	募集人数15 （計画）	募集人数15 （実績）	募集方法15	募集要項15	募集状況15	募集率15	募集額15	募集単価15	
募集区分16 募集年度16	募集月16 募集年度16	募集期16	募集人数16 （計画）	募集人数16 （実績）	募集方法16	募集要項16	募集状況16	募集率16	募集額16	募集単価16	
募集区分17 募集年度17	募集月17 募集年度17	募集期17	募集人数17 （計画）	募集人数17 （実績）	募集方法17	募集要項17	募集状況17	募集率17	募集額17	募集単価17	
募集区分18 募集年度18	募集月18 募集年度18	募集期18	募集人数18 （計画）	募集人数18 （実績）	募集方法18	募集要項18	募集状況18	募集率18	募集額18	募集単価18	
募集区分19 募集年度19	募集月19 募集年度19	募集期19	募集人数19 （計画）	募集人数19 （実績）	募集方法19	募集要項19	募集状況19	募集率19	募集額19	募集単価19	
募集区分20 募集年度20	募集月20 募集年度20	募集期20	募集人数20 （計画）	募集人数20 （実績）	募集方法20	募集要項20	募集状況20	募集率20	募集額20	募集単価20	
募集区分21 募集年度21	募集月21 募集年度21	募集期21	募集人数21 （計画）	募集人数21 （実績）	募集方法21	募集要項21	募集状況21	募集率21	募集額21	募集単価21	
募集区分22 募集年度22	募集月22 募集年度22	募集期22	募集人数22 （計画）	募集人数22 （実績）	募集方法22	募集要項22	募集状況22	募集率22	募集額22	募集単価22	
募集区分23 募集年度23	募集月23 募集年度23	募集期23	募集人数23 （計画）	募集人数23 （実績）	募集方法23	募集要項23	募集状況23	募集率23	募集額23	募集単価23	
募集区分24 募集年度24	募集月24 募集年度24	募集期24	募集人数24 （計画）	募集人数24 （実績）	募集方法24	募集要項24	募集状況24	募集率24	募集額24	募集単価24	
募集区分25 募集年度25	募集月25 募集年度25	募集期25	募集人数25 （計画）	募集人数25 （実績）	募集方法25	募集要項25	募集状況25	募集率25	募集額25	募集単価25	
募集区分26 募集年度26	募集月26 募集年度26	募集期26	募集人数26 （計画）	募集人数26 （実績）	募集方法26	募集要項26	募集状況26	募集率26	募集額26	募集単価26	
募集区分27 募集年度27	募集月27 募集年度27	募集期27	募集人数27 （計画）	募集人数27 （実績）	募集方法27	募集要項27	募集状況27	募集率27	募集額27	募集単価27	
募集区分28 募集年度28	募集月28 募集年度28	募集期28	募集人数28 （計画）	募集人数28 （実績）	募集方法28	募集要項28	募集状況28	募集率28	募集額28	募集単価28	
募集区分29 募集年度29	募集月29 募集年度29	募集期29	募集人数29 （計画）	募集人数29 （実績）	募集方法29	募集要項29	募集状況29	募集率29	募集額29	募集単価29	
募集区分30 募集年度30	募集月30 募集年度30	募集期30	募集人数30 （計画）	募集人数30 （実績）	募集方法30	募集要項30	募集状況30	募集率30	募集額30	募集単価30	
募集区分31 募集年度31	募集月31 募集年度31	募集期31	募集人数31 （計画）	募集人数31 （実績）	募集方法31	募集要項31	募集状況31	募集率31	募集額31	募集単価31	
募集区分32 募集年度32	募集月32 募集年度32	募集期32	募集人数32 （計画）	募集人数32 （実績）	募集方法32	募集要項32	募集状況32	募集率32	募集額32	募集単価32	

表6 大堂原目選出十目製品觀察表

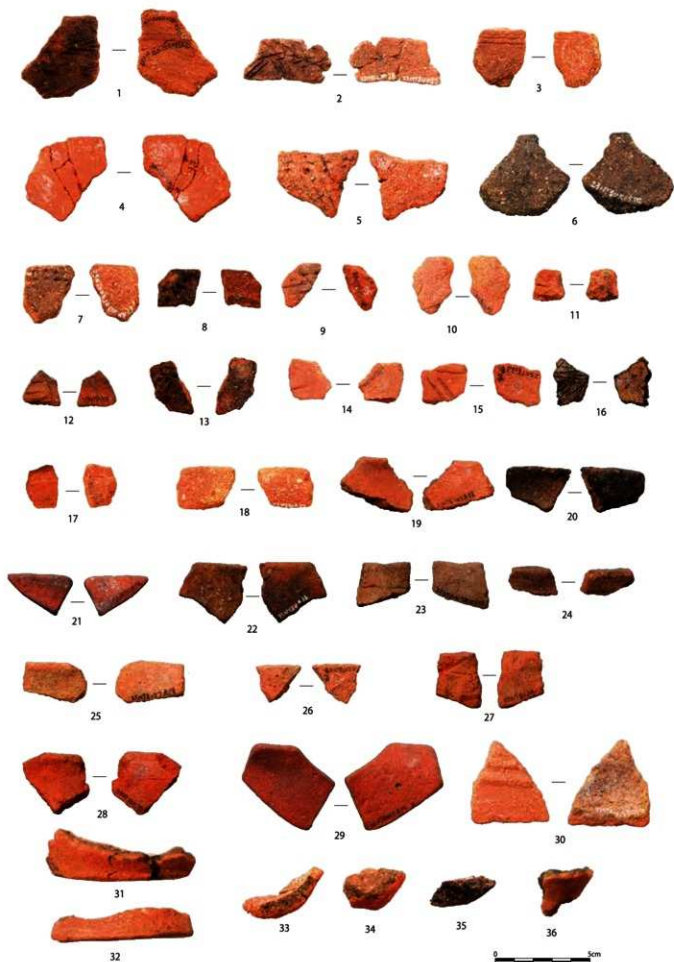
[illegible]

表 7 大營原目標出土石器觀察表

探頭番号 探底番号	方位	位置	測定			観測事項	注目点
			長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	重量(kg)	
第14号7 第14号8	方位	砂岩	6.3m	0.5	75	277.90	7.19



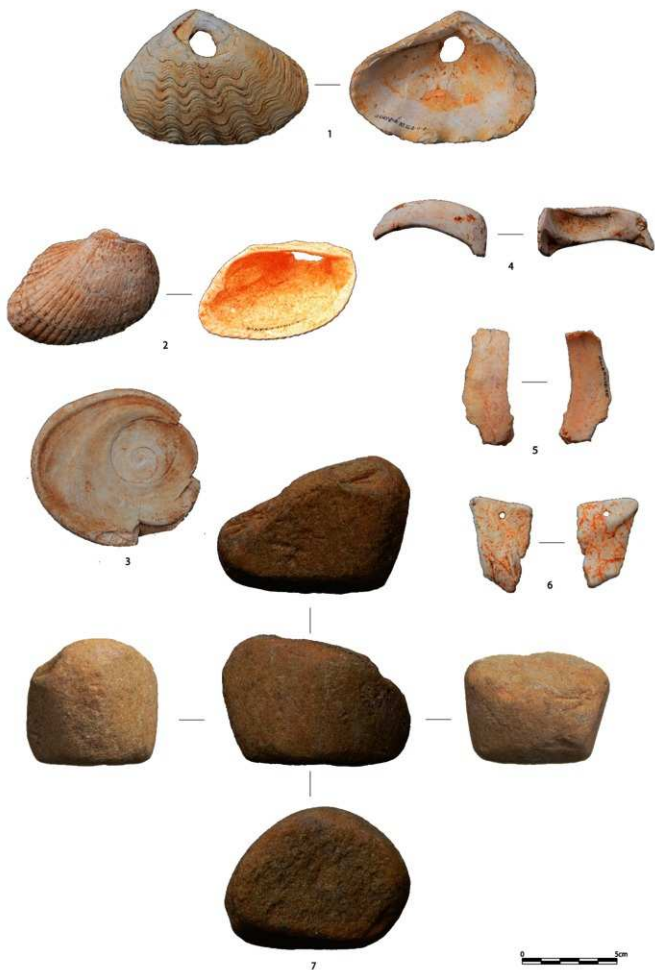
第 24 图 大堂原貝塚出土土器



図版 3 大宮原貝塚出土土器



第 25 図 大堂原貝塚出土土製品及び石器



図版 4 大堂原貝塚出土製品及び石器

第2節 地形測量調査

今回の調査では、今後ナングシク遺跡群の史跡整備を進めるにあたりその基礎資料として必要となる地形測量図の作成を行った。以下、ナングシク遺跡群の概要及び測量成果を報告する。

1. ナングシク遺跡群

所在地：名護城原
立地：丘陵
時代：グスク時代～近代

遺跡の概要

名護市街地の東側に位置する丘陵に立地し、標高約106mの丘陵頂上部を主郭とし、その中腹辺りを削平して築かれた山城形式のグスクで、県内では数少ない石垣を持たない土のグスクである。グスクは名護岳から西側にかけて延びる舌状台地を利用して築かれている。台地の北側及び南側は自然の急斜面となっており、特に北側は深い谷間となり川が流れている。一方、尾根筋にあたる西側及び東側は緩やかな斜面で、特に東側の名護岳から続く尾根筋はグスクの最大の弱点となっている。その弱点を補うために、尾根筋を遮断するようにして幅約8mの大きな堀切と幅約2mの小さな堀切を二重に設けて敵の侵入を防いでいる。さらに、北東側から東北東側にかけては、主郭のすぐ下にあたる斜面中腹部に敵の侵入を許さないための細長い曲輪を廻しているほか、主郭以外にもグスク城内には比較的大きな曲輪が数箇所存在しており、当時はこれらの場所に主要な施設が配置されていた可能性が高いとみられる。

ナングシク遺跡群は、当市教育委員会が昭和54～56年度にかけて実施した遺跡分布調査において、頂上から中腹付近にかけてグスク土器やカムイ焼、中国産青磁や染付、沖縄産陶器などが採取され、遺物の分布する範囲をA～Dの4地点に分けられている。

調査の概要

ナングシク遺跡群を含む周辺地域の約128,000㎡の範囲を調査対象とし、その範囲を4つに分けて平成21～24年度の年度ごとに地形測量を実施した。



第26図 ナングシク遺跡群位置図



1. 神アサギ



2. クバヌシチャ

写真13 ナングシク近景(1/3)



1. 根神屋



2. ノロ殿内



3. 首里殿内



4. ウチ神屋



5. フスミ屋



6. イジグチャー



7. ナングシクから望む名護市街

写真 14 ナングシク近景 (2/3)



1. 名幸祠



2. 北山名幸の墓



3. 奉納殿



4. 拝殿



5. プンヌニー（収骨墓）



6. ナングシクで行われた奉納おどり



7. 東江中学校から見るナングシク

写真 15 ナングシク近景 (3/3)

第V章 総括

今回の調査では、7 遺跡において遺跡詳細分布調査を実施した。調査内容としては、開発に伴う範囲確認調査と地形詳細測量に区別することができ、それぞれ今後の本市における文化財保護行政を進めるための貴重な資料になるものである。以下、範囲確認調査及び地形詳細測量の調査成果を整理しながら若干の検討及び今後の課題などを加え、本報告の総括とする。

第1節 試掘調査

周知の遺跡及びその近隣地において開発が計画されている遺跡において、遺跡の広がりを確認するための試掘調査を安和与那川原遺跡、名護貝塚、天仁屋原遺跡、溝原貝塚、羽地間切番所跡、大堂原貝塚の6 遺跡において実施した。

今回の調査で最大の成果として、安和与那川原遺跡の発見が挙げられる。安和与那川原遺跡が分布する一帯は、これまで安和貝塚の一部と考えられていた。平成18 年度に実施した試掘調査で嘉徳Ⅰ式B 土器が出土し、安和貝塚と異なる遺跡の可能性が指摘されたが、試掘範囲の狭さなどからその判断は保留されていた。しかし、平成19 年度に実施した調査によって、安和貝塚との複合性などが無いことが確認され晴れて新発見の遺跡として周知することとなった。安和与那川原遺跡は本市における80 箇所目の遺跡で、数少ない貝塚時代前期の遺跡である。出土遺物の大半は土器で、伊波式土器や萩堂式土器をはじめ、奄美地方の嘉徳Ⅰ式B 土器などが出土している。貝塚時代前期の土器以外にも貝塚時代早期後葉にみられる面縄前庭様式土器の範囲に入るとみられる土器片もみられることから、当初の予想よりも若干時代が遡る可能性もある。また、3 地区からは貝塚時代後期に属するものとみられる土器片も確認されていることから、安和貝塚との関連性も視野にいれ今後の調査を進める必要がある。当遺跡は、与那川砂防事業による河川改修の工事予定地に含まれることから、今後調査対象範囲を広げて遺跡の範囲を把握しながら適切な保護措置を講じることができるように関係各所と調整を進めていく必要がある。

また、大堂原貝塚の調査では、丘陵地の崖下で新たに遺物包含層が確認された。この崖下では斜面においても土器や石器が採集されることから、丘陵上にも遺跡があったと推測されるが、丘陵地の大部分では耕作地造成のための土地改良が行われているため遺物包含層を確認することはできなかった。一部土地改良の影響を受けていないとみられる丘陵縁辺部において石器が表面採集され、試掘坑からも土器片が採集されたが、層序が不明確であることや土器が非常に脆いことなどから、包含層の有無や土器の帰属時期を特定することはできなかった。また、丘陵地東側の盆地状に削平された休耕地に設けた試掘坑においても土器が僅かではあるが採集された。遺物包含層とみられる地層も確認できたが、土器が上部の客土との境付近から出土したことや試掘坑設置地点が丘陵地斜面を多少なりとも削平して造成されていることなどを勘案すると遺物包含層が残存していると断定することは避けた。前述の丘陵縁辺部と共に開発原因者と協議し、再度試掘調査を行い遺物包含層の分布状況を判断し、開発調整を行う必要がある。

名護貝塚及び溝原貝塚は遺跡全体が住宅密集地及び市街地に位置しているため、過去の開発や戦後の米軍による採砂の影響を受け遺跡の破壊が進んでいる様子が確認された。名護貝塚においては、昭和60 年の調査結果を踏まえて勘案すると名護十字路以南の道路下に未掘

乱の包含層が残存する可能性が高いと思われる。

天仁屋原遺跡及び羽地間切番所跡では、開発予定地が遺跡の範囲に含まれ無いものの近隣地に位置していることから範囲確認調査を実施した。両遺跡とも遺物包含層の痕跡を確認することができなかったことから、遺跡の範囲が及んでいないことが確認できた。

第2節 地形測量調査

当市教育委員会では、ナングシク遺跡群の史跡指定に向けた本格調査を平成26年度以降に計画している。そのための基礎資料として、平成21～24年度よりナングシク遺跡群の詳細地形測量を実施している。地形測量を実施するにあたり、等高線の間隔を0.5mと狭く計測したことで、ナングシク遺跡群が立地する丘陵台地の形状を詳細に把握することができ、今後調査計画など策定する上で重要な情報となる資料を作成することができた。当市教育委員会では、今後、この地形図を基にナングシク遺跡群域内の踏査を実施し、本格調査に向けた情報収集を進めていく予定である。

おわりに

本書で報告した平成19～23年度の分布調査は、開発調整に伴う範囲確認調査が主な調査となったが、今後も開発に伴う範囲確認調査は増えるものと思われる。それらの範囲確認調査及び本報告の成果を基礎資料として、今後、埋蔵文化財の適切な保護を図っていきたいと思う。また、ナングシク遺跡群や親川グシクのような史跡指定を目指した調査も今後進めていく予定である。

《参考文献》

- ・『名護市の遺跡(2) 分布調査報告書』名護市文化財調査報告 4 名護市教育委員会 1982
- ・『名護貝塚』沖縄県文化財調査報告書第 63 集 沖縄県教育委員会 1985
- ・『名護貝塚』名護市文化財調査報告 7 名護市教育委員会 1985
- ・『溝原貝塚』名護市文化財調査報告 9 名護市教育委員会 1989
- ・『県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書 フガヤ遺跡・田井等遺跡・羽地間切番所跡・仲尾次上グスク遺跡』名護市文化財調査報告 8 名護市教育委員会 1988
- ・『宇茂佐古島遺跡 - 宇茂佐第二地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書 - 』名護市文化財調査報告 10 名護市教育委員会 1992
- ・『宇茂佐古島遺跡 - 宇茂佐第二土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査 - 』名護市文化財調査報告 13 名護市教育委員会 1999
- ・『部瀬名南遺跡 - 市道・部瀬名線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告 - 』名護市文化財調査報告 15 名護市教育委員会 2002
- ・『名護市の自然』名護市動植物総合調査報告書 名護市教育委員会 2003
- ・『わがまち・わがむら』名護市史・本編 11 名護市教育委員会 1988
- ・『沖縄県史 各論編 第 2 巻 考古』沖縄県教育委員会 2003
- ・比嘉宇太郎 『名護六百年史』 沖縄あき書房 1985

報告書抄録

ふりがな	しないいせきしょうさいぶんちようさほうこくしょ 2									
書名	市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ									
副書名	開発に伴う範囲確認調査報告書									
巻次										
シリーズ名	名護市文化財調査報告									
シリーズ番号	第23集									
編著者名	宮城 智浩									
発行機関	名護市教育委員会 文化課 文化財係									
所在地	〒905-0021 沖縄県名護市東江1-8-11 (名護博物館内) TEL 0980-53-3012									
発行年月日	2013 (平成25) 年3月29日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯		東経		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	〇 / 〃	〇 / 〃					
あわとまがわ 安和与那川原 遺跡	おきなわけん なごし 沖縄県 名護市 宇安和	47209		26° 36' 46"	127° 55' 40"	2007.12.19～ 2009.05.01		96 m ²	市内遺跡詳 細分布調査	
なごし 名護貝塚	名護市大甲			26° 35' 26"	127° 59' 3"	2008.12.19～ 2009.05.07		36 m ²		
てんじんるい 天仁屋原遺跡	名護市学天仁屋			26° 34' 3"	128° 59' 14"	2008.01.15～ 2008.01.16		8 m ²		
うらぶき 溝原貝塚	名護市東江			26° 37' 28"	127° 59' 14"	2009.08.24		6 m ²		
うらぶき 羽地間切番所跡	名護市宇城川			26° 37' 28"	128° 0' 54"	2010.04.26～ 2010.05.06		22 m ²		
うらぶき 大堂原貝塚	名護市宇済井出			26° 40' 43"	128° 0' 42"	2011.09.05～ 2012.02.10		132 m ²		
ナングシク 遺跡群	名護市学名護			26° 35' 19"	127° 59' 34"	2009.11.26～ 2013.03.29		128,000 m ²		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項		
安和与那川原遺跡	遺物包蔵地	貝塚時代前期		—		土器、貝製品		新規発見の遺跡		
名護貝塚	遺物包蔵地	貝塚時代後期		—		土器		過去の開発により攪乱		
天仁屋原遺跡	集落跡	グスク時代～近代		—		—				
溝原貝塚	遺物包蔵地	貝塚時代後期		—		土器		遺物包含層確認できず		
羽地間切番所跡	番所跡	グスク時代～近世		—		—				
大堂原貝塚	遺物包蔵地	貝塚時代早期～後期		—		土器、貝製品、石器				
ナングシク遺跡群	グスク、集落跡	グスク時代～近世		堀切など		—		地形測量		
要 約	平成19～23年度にかけて安和与那川原遺跡、名護貝塚、天仁屋原遺跡、溝原貝塚、羽地間切番所跡、大堂原貝塚の6遺跡において範囲確認調査を実施した。また、平成21～24年度にかけてナングシク遺跡群の地形測量を実施した。範囲確認調査を実施した6遺跡のうち安和与那川原遺跡及び大堂原貝塚において未掘削の遺物包含層を確認することができた。安和与那川原遺跡は本調査において新規発見された遺跡である。名護貝塚及び溝原貝塚は市街地や住宅密集地に位置するため、調査地点は過去の開発における影響を受けていた。また、天仁屋原遺跡及び羽地間切番所跡における調査地には遺跡の広がりは確認できなかった。 ナングシク遺跡群の地形測量では、等高線の間隔を0.5mまで表示したことにより詳細な地形図を作成することができた。この地形図は、これまで詳細な調査が行われていないナングシク遺跡群において貴重な基礎資料である。									

名護市文化財調査報告書－23

市内遺跡詳細分布調査報告書 II

－ 開発に伴う範囲確認調査報告書 －

発行年 2013年 3月29日
発行 名護市教育委員会
編集 名護市教育委員会 文化課 文化財係
〒905-0021 沖縄県名護市東江1-8-11（名護博物館2F）
TEL 0980-53-3012

印刷 沖縄高速印刷株式会社
沖縄県南風原町字兼城577
TEL 098-889-5513
